

## 智湧了然と宋の天台

大松 博典

## 一

宋（九六〇—一二七九）の仏教を中国仏教史の視野で捉える時、転換期あるいは爛熟期という言葉がよく使われる。中国天台宗を考えた場合、この時期、前代の諸師の活躍を受けて、天台の正統を自認した四明知礼（九六〇—一〇二八）が登場するのであるが、それは正に転換期・爛熟期を象徴するかの

ように、天台宗内部に深刻な軋轢を引きおこすことになった。いわゆる山家・山外の論争がそれである。皮肉にもこの論争が宋の天台を特徴づけることになるのであるが、この宋の天台も一一二七年の靖康の変によって分断される前半の北宋と後半の南宋とでは、趣きを異にしているといえよう。すなわち、知礼を一方に、孤山智円（九七六—一〇二二）・梵天慶昭（九六三—一〇一七）等が論争を繰り返した北宋と、山家派と称された知礼の法系が栄えた南宋とでは、その性格が違っているのである。私はここ数年南宋の天台に着目し、四明

三家の中で、特に後代に影響を与え最も長くその法系が続いた南屏梵臻（一一一〇—一〇三三）系の諸師について考察を続けてきた。そこには強記博覧・博引傍証の学風が見てとられたのであるが、加えて、当時の仏教界をリードした禅宗との交渉が顕著であることがわかったのである。

知礼以後の天台をさらに解明する意味で、今回は神照本如（九八二—一〇五二）系の傑僧、智湧了然（一〇七六—一一四二）について考えてみたい。

## 二

了然については、四明教学に綿密な考察を加えた安藤俊雄氏が、その著『天台思想史』の中で「智湧了然の教学」という一章をもうけ詳細な検討を行なっている。また、佐々木憲徳氏、島地大等氏、中里貞隆氏、上杉文秀氏が、それぞれの立場から了然を論じている。近年では池田魯参氏が「大乘止観法門研究序説」の中で了然を取りあげている。これらによ



三

了然の著作にいえることは、述作意図が比較的明瞭に現われていることである。『宗円記』についていえば、初めに十因をあげて述作の旨意を述べる。すなわち、

- 一、欲<sub>レ</sub>会天台所說止觀与<sub>レ</sub>師不<sub>レ</sub>殊故。
- 二、欲<sub>レ</sub>知天然妙体惟一性<sub>レ</sub>故。
- 三、欲<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>了本覺之法尚属<sub>レ</sub>用故。
- 四、欲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>曉<sub>レ</sub>性德善惡脉属<sub>レ</sub>修故。
- 五、為<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>知修惡当体法是情<sub>レ</sub>故。
- 六、為<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>私所起惡用不<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>修故。
- 七、為<sub>レ</sub>証<sub>レ</sub>今立<sub>レ</sub>理由<sub>レ</sub>事差<sub>レ</sub>權因<sub>レ</sub>実妙顯非<sub>レ</sub>師心有<sub>レ</sub>承稟<sub>レ</sub>故。
- 八、為<sub>レ</sub>自備<sub>レ</sub>忽忘<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>尋討<sub>レ</sub>故。
- 九、為<sub>レ</sub>呈<sub>レ</sub>露所解<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>迷錯<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>刪削<sub>レ</sub>故。
- 十、為<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>同学<sub>レ</sub>直入<sub>レ</sub>觀道<sub>レ</sub>故。

という。それぞれが大きな意味合いを持っていることは確かであるが、特に一と十に注目してみたい。一についてはみれば、『大乘止観法門』を南岳慧思（五一五―五七七）の親撰として疑わず、それが天台智顛（五三八―五九七）の所説と何ら変わるところではないことを証明するための了然の腐心、言い換えれば、種々問題のある『大乘止観法門』を、智顛の思想の原点は慧思にあり、とする考え方で、あるいはそれ以上に、慧思の教学が後の天台学と相違するものではない、とす

る考え方で、または逆に慧思の教学に最大級の評価を与える考え方で、了然の見方が現われているといえよう。十については『十不二門枢要』の述作意図と関連して興味深い。すなわち、『十不二門枢要』では、

十門之作正為<sub>レ</sub>三觀<sub>レ</sub>故日觀心乃是教行枢機轉以<sub>レ</sub>枢要<sub>レ</sub>名云

という。つまり、觀を中心に据えて教を説こうとしている。

了然の姿勢が、こうした觀を強調することを基底として展開してゆく過程には、草堂処元と神智從義（一〇四二―一〇九一）の論争をもって、山家・山外の論争がひととおり終結した、という時代背景も無縁ではないであろう。すなわち、山家・山外の論争も教觀二面にわたって論義がピークに達し、新しい展開が切望されていた。換言すれば、湛然教学の權威を前提として確認することから始まった宋の天台も、論争を通して理論的な研究がひとまず終わり、あらたな実践に移る段階を迎えていた。了然は丁度その転回期に位置したのであり、諸文を解釈するにあたっては、觀を極めて重視し、どのようにして現実の実践に展開させるか、ということに最大の関心を払ったのである。つまり、止觀を根底に、積極的な実践工夫への転換をはかったのである。そうした時代の要請にも見事に答えた了然の出現ではあったが、これに続く僧はなく、やがては神照系が最も早く衰えていったのである。（細註省略）

（専大北上高校教諭）